南懷仁が支那に紹介した世界地理書に就て（二）

鮎澤信太郎

六、坤輿外紀

坤輿外紀一卷は清の吳震方の編輯に係る「說鈴」叢書や龍威祕書等に入れられて其の內容に接することは容易である。刊行の時を知り難いが、記す所の珍奇なる爲しばしば印行されてゐるらしい。四庫總目提要の解說にも「案懷仁坤輿外紀、別有全本、已著於錄、此本摘錄其文、併刪其圖說」云々とある如く、右に謂ふ全本、即ち坤輿圖說の中地理的怪奇とでも云はるべき記事を摘出又は簡略にして一編としたものである。

此書に記るされた。人奉四元行、巨鳥異獸、石人、人異、把雜爾、小自鳴鐘、冬至日短、聾石三奇、亞既剌、騾能傳種、亞爾加里亞、無核果、樹膏鳥卵、懶面、長人、異鷄、無對鳥、獨角獸、鼻角、乳羊、般茅狗、大懶毒辣、獲落、撒剌漫大辣、狸猴獸、獅、意夜納、蘇、長吻鵲、無目蛇、駱駝鳥、四絕、七奇、海族、海產等の物語りは凡そ奇異なものばかりである。

右の記事は大概坤輿全圖に註記されたものと一致するが、海族・海產等の條は反つて坤輿外紀の方が全文であつて全圖の記事は途中省略されてゐる。而して、寧ろ、こゝでは、艾氏職方外紀に坤輿外紀の文章其儘を見出すことが出來る。從つて、西方要紀を除く南氏の三本の關係は利瑪竇の坤輿萬國全圖の說明文を摘出して坤

輿全圖說或は坤輿圖說等と云つたのと異り、南氏に於いては逆に先づ坤輿圖說二卷が一六七二年に刊行され、更に二年を經て一六七四年に坤輿全圖が出來た。そして前者坤輿圖說から坤輿外紀が摘出されたのである。乃ち圖說の文章は地圖中に入れる爲に省略されたので圖說の記事を摘出した坤輿外紀の記事が所に依つては全圖の其れより全文であるわけである。而して其の記述する所は前述の如く一世紀近くも前の利瑪竇・艾儒略の地理書と殆ど同一のもので我々はそれらの間に質的の相違を見出すことが出來ない。其の理由は利氏艾氏又は南氏も時は距つても、同樣の社會狀勢にある支那に於いて、同樣の立場と目的とから爲されたものである所にあるであらう。

七、東洋史上に及ぼせる影響

南懷仁が歐洲全土の耶蘇會士に發した公開狀に容易に近づき得ない玉座に獨り數學が屢々天子のそばに陪席すること、また支那に於いては基督教が天文學の外衣を纏つて高官に近づくことを報じてゐるさうである。（後藤末雄氏康熙帝とルイ十四世…史學雜誌四二の三・六八頁…參照）此のことは南氏の支那に紹介した地圖や地理書に就いても同樣であらう。

耶蘇教宣布に關して種々の工作を施されてゐる前記諸書がしばしば刊行流布されたことだけで、それが耶蘇教公布の爲に幾分でも力のあつたことは想像に難くない。更に又それは利瑪竇や艾儒略の紹介した世界地理知識と共に支那人に新世界を教へ舊い世界觀を變革する爲に役立つた。(二)

魏源が林則徐の翻譯した四洲志を增補して作つた海國圖志は道光二十二年（一八四二）に六十卷本が、又咸豐二年（一八五二）には百卷本が出て近世東洋に於ける世界地理書として最も有名なものである、此書には利瑪竇の坤輿萬國全圖、艾儒略の職方外紀等と共に南懷仁の坤輿全圖、坤輿圖說の諸書が引用參考せられてゐる。海國

圖志卷七十六國地總論下には「南懷仁坤輿圖說（坤輿圖說與職方外紀大同小異凡雷同者不重錄惟此數條外紀所無故別出之）」として、坤輿圖說の文章を多く引用してゐる。（坤輿全圖の兩端圖說二幅殆ど全部と、更に詳細な所もある）又道光甲辰十年（一八四四）に刊行された海外番夷錄の中、徐朝俊輯する高厚蒙求摘畧なる書は如何なるものに據つたか記るされてはないが、其の記事を一見すればこれが艾儒略の職方外紀か或は南懷仁の坤輿全圖又は坤輿圖說に依據したものであることは明瞭である。

猶、近くは光緒丁丑十四年（一八七七）に祺壽萱の輯參した小方壺齋輿地叢鈔に編入された香山・林謙の纂する國地異名錄には「美洛居米六合（俱明史）馬路各（海錄）木路古（坤輿圖說）」「阨入多（職方外紀）阨日多（坤輿圖說）厄日度（地理備考）」等の如く、職方外紀と共に南懷仁の坤輿圖說が大いに利用せられ、又先に見た如く坤輿全圖は十九世紀半ば頃になつて二度も刊行されてゐる。而も此の刊行は歷史的資料として爲されたものではなく現實に利用さるべき世界圖として刊行されたものであることは道光二十九年（一八四九）徐繼畬著す瀛環志略中、劉鴻翺の撰した序文の初めに「吾閱康熙年間西洋懷仁坤輿全圖。周圍九萬里。宇中山川。城郭民物。瞭如指掌」云々と述べられ、又其の終りに「松龕（徐繼畬）幸生車書大同之世。海洋諸國梯杭而至。諮其所經歷歐羅巴阿非利加亞墨利加者。謹志其所可信。間補懷仁輿圖之所未備」云々と記るされてゐるに據つても之を證することが出來よう。

此類の書を仔細に調べたら猶南懷仁の紹介した地理書が支那人の世界知識を增進啓蒙するに與へて力のあつた證跡は少くなからう。前二書の如く道光年間に刊行せられた世界地理書は前掲海外番夷錄に王璽が序して「方今烽烟告警有志者、抱漆室憂蔡之念、有中流擊楫之思、外洋輿地不可以弗考也」と云ふ如き、又鹽谷世弘の言葉をかりるなら、林則徐が「手輯」四洲志。切索」夷情。」（隔華論、論宣宗黜林則徐の條）と云ふ如

く、押寄せる西力の何物なるかを知らうとする切實なる要求から編輯されたものである。その要求を滿すべく艾儒略やこゝに見る南懷仁の紹介した地理書が利用されてゐるのは興味あることである。

次に南氏が支那で著した地理書は我國にも流入して江戸時代の人々に幾度か採り上げられる。今、管見に入るものを上述の順に從つて其の資料を擧げ江戸時代我國人の世界知識習得の爲に利用された證據としよう。

西方要記は山村昌永の增譯采覽異言（一八〇二年記）引用書目、漢土の部に記るされ、同書中にも引用される所が多い。又、文政八年頃の記述とされる松屋高田の松屋筆記卷六十一（四十二）に「西方要記小引五大洲及路程」と題して西方要紀の第一に擧げられた「國土」の條及び「路程」の條の全部を引用し、終りに「按に卷首に泰西利類思安文思南懷仁著とあり利瑪竇が職方外紀に合考べき書也」（國書刊行會本松屋筆記第一・三百四十九頁）とあり、又、同卷（四十二）人魚、（四十四）西洋風俗の項に西方要紀「海奇」及び「風俗」の條が各々引用されてゐる。松屋高田は「淸の山阜孔尙任が人瑞錄（昭代叢書十三に收む）」（前揭書三五一頁）などゝ所々に記して潮山來の昭代叢書に收むる諸書を見てゐるから、此の西方要紀も昭代叢書に據つて見たものであらう。

次に坤輿圖說は江戸時代に我國へ餘り多くは入つてゐないらしい。筆者の狹い範圍の調査では唯一つ山村昌永の增譯采覽異言卷之六エジプテン（阨入多）の條に「又泥羅河（ニロス）ノ地中海ニ入ルノ處ニ一ノ島アリ法羅斯（ペロス）ト云昔時此處ニ一ノ高臺ヲ建テ上ニ火ヲ點シ夜行ノ海船ニ便ナラシムヲ其規制甚崇高巧妙コレ亦天下七奇ノ其一ナリ（南懷仁坤輿圖說云法羅海島高臺厄日多國多祿茂王建造崇隆無際高臺基址起自丘山以細白石築成頂上多置火炬夜照海艘以便認識港涯叢泊）今ハ此島ノ大地ノ間水乾キテ兩地相連屬セリ」とあり、昌永は南懷仁の坤輿圖說と明記して其の記事を引用してゐる。

此れは南氏坤輿圖說なる書を見ることが出來

れば何等の問題はないのであるが先に見た如く其れを見る機會がないし、又山村昌永は南懷仁の著述に係る他の諸書を見てゐるので右に引用した南氏坤輿圖說が果して誤りなく坤輿圖說其ものであるか否かを調査しなければならない。

第一に右の山村昌永の記した「南懷仁坤輿圖說云」の文字は筆者の據る東京文理科大學圖書館本以外に帝國圖書館本・靜嘉堂文庫本等其他五つの別本に就いて校合を試みたがいづれも之と一致してゐるので誤りでないことは確である。

第二に南懷仁の著書で坤輿圖說と誤り易い書名は坤輿全圖・坤輿外紀であるが、此の兩書（全圖・外紀）には勿論、西方要紀にさへ右に引用した如き文章は見えない。但し坤輿外紀には「七奇」の條を設けてはあるが右に相當するものとしては「七、羅法海島高臺」とあるのみで昌永の引用したものとは同じでない。

第三に筆者は宮城縣之圖書館所藏の南氏坤輿外紀及秋岡武次郎先生所藏の坤輿外紀（いづれも寫本）並に康熙二十二年、張潮の編した虞初新志卷十九に收錄された七奇圖說なる南氏の著述を見た。此の七奇圖說は四庫全書總目提要坤輿圖說解說に「終之以西洋七奇圖說」とある如くもと坤輿圖說の一部である。山村昌永の增譯采覽異言に「南懷仁坤輿圖說云」として引用した記事は此の七奇圖說の一節と同である。從つて、昌永が南氏坤輿圖說を見てゐることは明確である。

猶其上秋岡武次郎先生は「嘉永三年庚戌十二月除日校訖逢谷生」と記るされた坤輿圖說の抄寫本を藏せられる。此等に據れば南氏坤輿圖說も非常に稀ではあるが江戸時代に我國へ入つてゐることは確かである。(二)

第三には坤輿全圖であるが、之は博覽の藤田元春教授も「日本にこの南懷仁の兩半球圖は傳はらなかつたとみえて、新井白石も齋藤正謙も共に一言してゐない」(藤田先生著日本地理學史

三一四頁註記）云々と記るされてゐる如く、まして筆者の管見を以てしては江戸時代に此の坤輿全圖の我國に傳入した證跡を未だ見出すことが出來ない。然し勿論より詳細な調査の結果に據らなければそれが全然傳入してゐないとは斷ぜられない。

最後に坤輿外紀は山村昌永の增譯采覽異言の引用書目にもあり、嘉永五年（一八五三）に篠田忠元順の誌す序を附し、「東都城北清溪譯解」の坤輿外記釋解二卷なる原文に解を併記した書が刊行されてゐる。(三) 此の外に秋岡武次郎教授は原文だけの翻刻本を所藏せらるゝ由である。前にも記した如く此書の內容は珍奇なる地理的怪談が多いので人々の好奇に投じたものであらう。嘉永甲寅（安政元年、一八五四）浮世繪師柳川重信畫く改正海外諸島圖說後集の終りに「長人、坤輿外紀、南懷仁」と題して、「長人國もと智加國と名づく地すこぶる冷なり人の長一丈許遍體みな毛あり弓矢を持ち長六尺亦一矢を喔插入口中羽を沒するに至る以勇を示し男女五色を以て面に畫て文飾をなすといへり」とあり、明治に近づいてからも防聞に行はれたやうである。

右に擧げた樣な南氏の中國に紹介した世界地理書が我國江戸時代に傳來、利用された證跡は猶仔細な調査に據つて益々增加するであらう。(四)

(一) 利瑪竇が世界圖を作る際にも自ら次の如き豫想をしてゐる。天子に捧呈した「その地圖にはキリスト教の眞理に關する色々の事柄や他宗教の誤謬が示されてあるのだから、一層人々はそれを排擊したのである。該地圖は常に國王の住居內にあるのだから國王にしても王族にしても、他日吾々のキリスト教を知り、それに就いて質問をなされん事を希望する。彼等は他國に比して自國の狹い事を知り、恐らく其の高い鼻を低くし諸外國と交誼を結ぶに至るであらう」（一九一〇年利瑪竇卒後三百年記念祭に利氏鄕家に傳つてゐた利氏自筆の紀事書を Father Tacchi Venturi が整理して刊行した "Commentaries" の一節、こゝでは英人、J. F. Baddeley 氏英譯引用したものゝ孫引である。The Geographical Journal. Oct. 1917 P. 257 所收）と。

(二) 私は西川如見の增補華夷通商考や森島仲良の萬國新話等は職方外紀の記事を翻案したものと推定して置いた（地球

二四の二）が斯うなると其等が南氏坤輿圖說に據つたものと想像されないこともない。然し勿論周圍の事情から十中の九は職方外紀と見ることは自然である。こゝでは、前號註記通りいづれとも斷定を避けて諸先生の御示敎を仰ぐこととする。我國に於ける南氏坤輿圖說に就いて村松繁樹氏の日本地理學史（岩波講座地理學六一頁）には「元來白石は元・明の史書に通じてゐたに加へ、先きの南懷仁（Ferdinand Verbiest）の坤輿圖說を通じて北歐系文化の和蘭人より資料を得た上に、また此の南歐系文明の資料を採つたことは彼の世界知識を甚だ豐富にした」と述べられ、新井白石が南氏の坤輿圖說を既に見てゐるとされる。然し、白石の西洋紀聞及采覽異言に關する限り其の證跡が無いやうに思はれる。白石が采覽異言卷第一の劈頭に「歐邏巴凡譯文係ニ明人所レ刻坤輿圖說。後皆倣レ此。」と記した坤輿圖說は南懷仁のものではなく、利瑪竇の坤輿萬國全圖に註記せられた漢文であることは其の內容其他に據つて明瞭である。猶、村松氏は同書三四頁に於いて利瑪竇の「地理的述作の中最も注意すべきものを坤輿萬國地圖及び輿地圖說とする」とされ。輿地圖說なる書が萬曆三十年（一六〇二）に北京で刊行されたとされてゐるが、利瑪竇の場合は坤輿萬國全圖と輿地圖說と別々のものでなく、輿地圖說は全國中の說明文に外ならない。尤も利氏世界圖は非常に大きいので取扱ひ上不便の爲、後人が地圖と圖說を別個に手寫或は刊行したことはある。例へば一六九九年（?）貴州總督の刊行したと云はれるもの、又は享和二年稻垣子戩の刊行したもの等が其れである。我國には此種の寫本がかなり多く傳つてゐる。勿論然し、此れは村松氏の誤りではなく高槻未知生氏の誤りが引嗣がれたものと思ふ。（高槻氏德川氏時代に成れる邦文海外地理書解題歷史地十九の二の七九・八〇頁參照）

（三）筆者は中山久四郎博士所藏本に據つたが、秋岡先生も此書を所藏せらるゝ由である。

（四）南懷仁の著書中「新製靈臺儀象志」は寶曆十三年（一七六三）に靑木昆陽の出した「昆陽漫錄」卷二の「滑車」の條に圖とその說明が引用せられてゐるのを始として、本田利明の西域物語にも其名が見え當時の寫本が所々に存在してゐる。

八、結　語

以上南懷仁が中國に紹介した世界地理書類に就いて其の由來、內容の梗概等の略說を試み、更に支那及日本に於いて世界地理知識增進の爲に利用せられた證跡を見た。利瑪竇や艾儒略まこゝで南懷仁の場合も、彼等の世界地理を支那に紹介する大きな目的の一は所謂尊大なる中華思想を幾分でも世界地理の眞實を示すことに

依つて破壞し支那を西洋諸國と對等の形に於いて認めさせようとするにあつたことは前に註記した如くである。斯かる彼等の目的は支那では勿論、やがて日本に於いても充分達せられることになつた。本田利明の西域物語卷上に「極西の南懷仁支那北京に入梅文鼎を以て糺明するに紛なく豪傑なれば、天文官の任を蒙りて觀象臺の創造あり、六儀とて六品の測器を製作して新に天象を測量し新曆を改革あり、康熙二十三年に至て大成し、名て律曆淵源といふ、總て一百卷是南懷仁が功なり、仁が著に新製靈臺儀象志に圖繪と共に十六卷に、測量の諸器械製作の仕方及測法等委細に載、其外萬曆年間に翻譯なりたる徐光啓が著に新法曆書百餘卷、及蛔的我が著に七克今既に日本の頒曆の元書、則歐羅巴に製作なり、然れば天下の父母國ともいふべきを、夷狄杯とは暗昧なるに非ずや」(大日本思想全集11一四三頁)などゝ云つてゐる。此の記は必ずしも南氏の地理書とは直接關係はないかも知れないが、やはり彼等の紹介に係る地理書も亦他の總ての西洋科學の書もやがて右の如く東洋人啓蒙の役目を果す點に於いて歷史上興味ある問題となるのである。

此の小論は秋岡武次郎教授の筆者に示された貴重本と先生の御示教に依つて成る所が多い。記して謝意を表する次第である。

追　記

○其後、本論中の虞初新志は文政六年癸未六月に荒井廉平なる者が訓點をして出版してゐることを知つた。從つて、南懷仁の七奇圖說は我國にて翻刻出版されてゐたのである。

○內閣文庫に坤輿圖說(「昌平坂學問所」「文化己巳」等の朱印あり)なる編著者不明の寫本があるが之は內容を見ると「仁等從遠西至中夏歷九萬里」云々などの文句あり、明かに南懷仁の坤輿圖說の抄寫本である。之等は機會を得て改めて紹介したい。

(一九三五・七・二八)